答辞

寒くて厳しい冬の風も和らぎ、さわやかな風がそっと頬を撫でていく、気持ちの良い季節となりました。

本日は教職員の皆様をはじめ、多くの皆様のご臨席の元、このような盛大な式典を挙げていただき、卒業生一同心より御礼申し上げます。また、只今大野学長先生より式辞のお言葉を賜りましたことに、重ねて御礼申し上げます。

思えば 4 年前、この会場で入学式をあげたことを鮮明に覚えています。期待と不安を胸に抱きながら門をくぐったあの日から早 1449 日、私たちは諸先生方の御指導を受け、必死に学び、必死に考え、広く深く学問を修めてきました。しかし、学べば学ぶほど、自分の眼の前に広がる世界がとても複雑でとても広く、その広い世界の中では自分の積み重ねてきたものがちっぽけなものであったということを痛感しました。

4 年生になると、研究室に配属され、液体窒素中で眠っていた細胞が産声を上げました。慣れない研究室生活の中で細胞はなかなか言うことを聞いてくれず、思うような結果を出すことができず、大学に行きたくない、こんな生活やめてしまいたいと何度もくじけそうになりました。

でも、その度に励ましてくれる先生がいました、こんな自分を支えてくれる友人、家族がいました。暖かい言葉で励まされたり、本気で応援してくれたり、そんな人たちに出会えて、人間として一回りもふた回りも成長できたこと、それが農工大で過ごせた掛け替えのない日々であり財産である、今そう思えます。だからこそ、深い学問の世界で学んできたこと、つらい現実に向き合ってきたことを肯定することができます。

4 月より私たちはそれぞれ新しい道へと進んでいきます。20 余年の歳月をかけて自分自身が選んだ道へと歩み始めます。この先の人生で、描いていた未来と、歩んでいく道が違うかもしれません。それでも私たちは私たちが信じる道にそれぞれ進んでいきます。まっすぐに前だけを見つめて歩み続けます。

最後になりますが、私たちを支えてくださった、先生方、大学職員の皆様、先輩、後輩、友人、そして家族に心より感謝を申し上げます。

この農工大で過ごした奇跡とも呼べる日々が、ただの思い出にならないよう、ずっと胸に抱いていきたいと思います。

東京農工大学　農学部　応用生物科学科　4 年　畠中直人